

有為轉變

渡辺美知夫

有為転変

渡辺美知夫

近頃の世の中の移り変りの激しさ、早さには、老いの身は到底ついて行けそうもない。

私の生まれ育った関西の家には、井戸が二つあって、内井戸には既に、直径五十糎位の滑車に綱が掛かっていて、その両端に一つづつ桶がさがり、綱を手繰ると井戸の底から、交互に水が一杯になって登って来る仕組みになっていたが、外井戸は釣瓶つるびんであった。

垂直の太い柱の上に、水平に長い棒が掛かっていて、一方の端には文字通りの重石が結えつけられており、反対側の端には太い綱が下がって、その先に桶がついて、テコの原理で井戸の底へ降りて行くことになっていた。綱の代りに真直な竹が用いられていた時期もあったように思う。その竹なり綱なりを握って上下すると、水が汲めるのであった。こういう構造なので時折は、子供が竹なり綱なりに取り付いた拍子に引込まれて、誤って井戸に落ちることがあって、私は幼い頃

は仲々井戸端に近寄らせて貰えなかったものである。井戸端はいつも濡れているので、入り易く、たしかに足許が危なっかしくもあった。瓦を組み固めた井戸側は、一面青苔に蔽われるので、年に一度は掃除する必要がある、私もその際一度だけ井戸の中に吊り下げて貰ったことがあって、その時のヒンヤリとした感触を今も忘れない。夏にはこの井戸の中に西瓜を吊して冷やしたものである。

やがて、大正の末頃であったか、その井戸に厚い板の蓋またがされて、中央部に手押しポンプが取付けられた。把手とってを上下すると、太い蛇口一杯に、豊富な水が逆さかり出て、感心したものである。

このポンプ生活は、昭和初年私が東京の大学に入つて、故郷を去る頃もまだ続いていた。風呂を立てるのに、ポンプでガチャガチャと汲んだ水を、湯舟へ度々何十杯も運んだ記憶がある。水は思いの外に重いもの

だと思ひ知つたが、これが私の己むを得ぬ労働の一つであり、それがひ弱な少年の体力を、毎日のように鍛える一助にもなつていたことを、後になつて気付いた。とにかくこの頃の生活には、己むを得ぬ労働が何彼と必要で、子供は子供なりに、体力を費やすことが多かったものである。

照明器具の変遷も、私は順を追つて体験している。わが家の物置には、大小幾つかの行燈あんどんが仕舞われていたが、これを日常生活に使つた記憶は、私には既にない。實際に使つたのは、先ず石油ランプである。いろいろな意匠のランプがあつたが、ホヤに油煙がついて、それを拭きとるのが毎夕の面倒な仕事であつた。やがて瓦斯燈が現われた。ホウツキ型の、三、四種ぐらゐの絹製の袋に、マッチで火をつけると、忽ち燃えて、形のままの白いホヤが残る。非常に脆もろいので、チョツト触れただけで壊れるのが、厄介であつた。ガス栓をひねつて、そのホヤにマッチの火を近づけると、青白い灯りがともつた。石油ランプより遙かに明るく感じられた。「コー」という軽い音がした。その音が今も懐かしい。街灯にもガス灯が用いられるようになり、夜道が明るくなつたが、朝は消灯、夕方は点灯に、梯子

を担いだ男が街を巡回していた。ガス灯時代は比較的短くて、やがて電灯の時代が来た。裸電球であつたが、光度はガス灯よりやや明るい程度であつた。何ワットであつたかまでは、調べた覚えもない。メーターの数字が気になるのは、もっと「進化」してからのことである。

私の少年時代、汽車、電車はすでにあつた。汽車にはめつたに乘る機会がなかつたが、電車はチョイチョイ利用した。その電車も、最初は運転席にドアがなく、夏はともかく、冬は吹き曝しになるので、運転手さんが気の毒であつた。その後ボギー車とかいうのが出現して、両端にドアが付いた。数年おきに車体が改善されて行くのが珍しく、それを動かす運転手さんが羨ましくて、電車に乗る度に運転席の眞後ろの窓越しに、操作を飽かず見詰めていたりしたものである。男の子は少年時代に、一度は運転手になりたいという願望を持った覚えがあるのではあるまいか。

そう云えば中学生になりたての頃、但馬方面に出掛けたことがあつて、その際泊めて貰つた家の小学生の息子が、自動車は自分の家の前を通るので既に実見済みであつたが、汽車や電車はまだ見たこともないと言

うのを聞いて、ものを覚えるのにも境遇によって前後があるものなのだとすることに、妙に強い感銘を受けたものであった。ものの順序といえは、中学二年のとき、初めて化学実験の真似ごとをやらされたが、試験管の中に試料Aを入れ、次に試料Bを入れて、その結果起る変化を観察しているとき、これを順序を逆にしないで、試料Bを先に入れたらどうなるかが気になったので、化学の先生に質問して一蹴された覚えがある。近頃テレビの料理番組を見てみると、調味料の入れ方にもどうも一定の順序がある場合もあるらしいにつけて、昔一蹴された経験について、正しい答えは未だに解らぬまま、どうも自分のカンの方がマトモだったような気がしてならないのである。

自動車が私の生活に出現したのはずっと後のことになる。私の家は代々町医者であったので、往診用の人力があった。そう云えば駕籠かごもあったが、これはお蔵に入ったままで、一度でいいから乗ってみたいという私の願いは、遂に叶えられる折がなかった。人力車もめったに使われはしなかったようだが、私も一、二度は乗せて貰ったことはある。只私はそれを人間が曳くというのが、どうも気になった。自動車は、乗る人間

自身が運転するで、抵抗は感じなくて済んだ。その自動車の燃料がガソリンであって、それが大気を汚染することが由々しい問題になるのは、ずっと後のことである。私ができることを肌で感じたのは、一九七七年の暮メキシコシティーに降り立った時であった。この町の人はよくまあこの汚れた空気を辛抱できるな、と思わせられた。爾来私はガソリン自動車という乗物は、早晚廃棄処分すべきものだと思っている。

メキシコに渡ったときの乗物は勿論飛行機である。戦前には私は、自分には飛行機は縁のないものと思っていたが、その学校は地理的事情もあって、全寮制を採っていた。当時寮生活にストームは付きものであった。その頃新入生の一人が、そのストームに恐れをなして寮を逃げ出し、行方が判らなくなった。私共は手分けして、八方探し廻ったが、やがて彼が大連空港から、飛行機で東京へ逃げ帰ったことが判明した。私にはとても真似のできないことと、感嘆したことであった。そんなわけで、私は戦前には一度も飛行機というものに乗せて貰う経験はなかった。戦後もかなり経って、海外旅行がブームになりかけた頃、漸く私も人並みに、

飛行機を使って外国へ行ってみる気になった。それからは毎年飛行機のお世話になるようになり、お蔭でイギリスをはじめ、行ってみたいところへは殆んど行ってみることができるようになった。国内旅行にも飛行機を使うようになるのは、私の場合、その後のことである。

今では私の息子娘はもとより、孫たちも次々に自動車の運転免許を取っている。私自身はその機を逸したことを、今になってしきりに悔んでいるのだが、若い世代はやがて、軽飛行機をあやつるのは当り前ということになるであろう。

生活機器についても、例えば暖房にしても、私の少年時代には部屋全体を暖めるという発想はまだなかった。炬燵か精々掘り炬燵に背を丸めるしかなかった。熱源は木炭である。世間に炭酸ガス中毒事件が稀にしか起らなかったのは、部屋の建て付けが今ほど気密でなかったせいでもあるか。夏は軒に風鈴や軒しのぶを吊るし、縁台で蚊を追いながら夕涼みをした。関西には夕風ぎという現象があつて、夕方パツタリと風が止まり、その蒸暑さには閉口したもののだが、扇風機という電気機器がわが家に採用されたのは、漸く私の青

年期になつてからのことであつた。ルームクーラーが普及した現在も、これはわが家では日々愛用している。電気掃除機や洗濯機がすっかり日常化した今日でも、箒やハタキ、タワシや洗濯板が依然立派に余命を保っているのと同前である。

三十年ばかり住み慣れた家を思い切つて取り毀して、新しく建て換えたのは、七、八年前のことになるが、その家は昭和十五年生まれの長男が取り仕切つて設計したので、出来上がるまで私は一切干渉しなかつた。頼んだ大工の方に色々都合があつたとかで、基礎工事が略々済んでからしばらくブランクがあり、同じ頃工事が始まつた東京ドームの方が、わが家より先に竣工したのはとんだお笑い草であつた。

漸く出来上がったからと云われて来てみると、まるで他人様のお屋敷に迷いこんだようで、サツパリ勝手が判らず、入口の門の扉のあけ方にまで戸惑う始末であつた。床暖房にしたから、カーベツトは使うなど言われて、手持ちが無駄になるがなと、勿体なく思つたり、各部屋についているクーラーの操作が判らなくて当惑したり、トイレはもとより水洗で、便座を暖める装置まで付いているのに感心するやら呆れるやら、と

いう有様であった。水洗式は実は元の家でもすでに採用してはいたが、それについて旧宅の新築当時、周囲の家々から、このブロックが簡易水道であるため、水洗式は水を使い過ぎると抗議を持ち込まれたのを、改めて思い出したが、これは数年前、市役所から、水道が完成したに就いては、便所は水洗にするようにというお達しがあつて、わが家では浄化槽の掘り起こしまで命じられ、ここでも時の移りを感じたことであつた。

私が一番感嘆したのは、風呂がボタン一つで勝手に沸くようになっていたことである。ボタンの操作に馴染むのに暫くひまが要つたが、井戸水を何十杯とバケツで運んだ昔を想つて、いささか感無量であつた。そんなにまでして浮かした時間を、さて、どう使うのであろうかという氣もした。何か目的があつて、その目的を果すために、もつと時間を、というのではなく、機器の発達が先行して、人間はいつも取残され、手持無沙汰を持て余し氣味というのが現状ではあるまいか、などというのは余計な心配というものなのか。

そういえばモノの生産についても、私の幼少の頃は「自給自足」というのが本則であつて、余つたモノを他人に売り付けることは、副次的な問題であり、買い取

る側は生産者に対して、お蔭さまでと感謝する氣持がいつもあつたように思う。産業革命のお蔭で大量生産といふことが始まって、生産者は造り過ぎたモノを消費者に押し付ける必要が起り、生産者と消費者の立場が逆転して、素朴な感謝の念など片端から消えてしまった。現在ヒトは作り過ぎたモノの処分につつつを抜かしていると云えるのではあるまいか。この状態を何とか解消させる工夫をしないと、エネルギー浪費の問題も解決しないであろう。これは核の問題の処理と並んで、現在われわれの生き伸びるための緊急の課題だと思ふのだが、それが切実な問題にならないのは、ここでもわれわれの「進化」の度合の問題であろうか。

ところで最近急速に、われわれの生活に浸透し始めているのが、マルチメディアの問題である。戦前戦中生まれ世代は、これに当面して、ハタと当惑しているように見える。かく申す私自身、ワープロだの電子辞典だのといふものを当てがわれて、サテなかなかに勝手が呑みこめず、四苦八苦の末諦める外ないな、という態たらくである。ところが私の孫達は、男の子も女の子も忽ちのうちに、パソコンなどの操作をマスターしてしまつている。その昔私は祖父や父母からこ

とばや文字の手ほどきを受け、小学校に入ると、今度は先生方から読み書き算術を教えこまれることになった。私は英語には中学に入ってから初めて接したが、優秀な先生方がおられ、おまけにカナダ人の女の先生に前後七年通してお導きを受けることになって、これは望外の仕合わせであったと思っているのだが、つまり私という子供は親たちとか、先生方とか、オトナたちからも電子機器については、子供の方が順応性が豊かでもあり、スピードも速いようで、オトナの方がタジタジという有様である。「世は逆さま」現象が、ここにも起こっていることになる。封建時代を超越した明治維新の当事者たちが、殆んどすべて二十代の若者であったことも思い合わされ、現代は世代がもう一つ若返っていることが感じられる。

それにつけて気になるのは、思いこみの問題である。人間歳が寄ると頑固になるといわれる。歳をとるということは、自分の生活経験の集積が累増するということである。その累積に頼って、今日ともかくも無事であるのは、その累積が信ずるに足ることに外ならない、と思ひ込むと、そこにとすれば固陋さが生まれる。

この頑固さには掬すべき面も確かにあるが、既成事実には固執することは、事態の新しい転回に即応する知恵とは矛盾する。事態の転回が急激であればあるほど、この固執は弊害になる。

思い込みは大小となく、生活のあらゆる面にひそんでいる。思い込みの最大の問題は、当の本人が思い込みを思い込みだとは自覚していないところにある。

「柳はみどり花はくれない」とは、本来どういう時に用いることばか、よくは知らないが、柳はともかく、花は紅いとは限らないことは、今日誰しも心得ている筈である。

英語に *undermine* という語がある。辞書には「特に転覆などの目的で……の下を掘る」などという解釈がのっけていて、何となく不穏な、よからぬ意味を持つ語であることが感ぜられるが、私は現代の人間にとつて、自分の足許を掘り返してみることは、大変有意義なことのように感ぜられてならない。幕末に封建制をよしとする思い込みを「転覆」させてみることでできなかった人達が、時世の波に乗りそこねて、自滅して行った例が少なくなかったらしいことも、思い合わされる。

さて話をもとに戻すと、マルチメディアの発達のお蔭で、近頃は高校から始まって、小、中学校はもとより、幼稚園にまでパソコンが採り入れられ、教室の雰囲気が大幅に変わって来て、机の並べ方にまで及び、教室の壁が取り払われたところも少なくないらしい。教師の役割も、一方的に御託宜を詰めこもうとする態度から、生徒の自発性を促しつつ、補助的なアドバイザーの姿勢に変わりつつあるように思われる。オトナが権威主義を当然のこととする思い込みを脱却しつつあることが察せられる。この現象を更に進めると、明治以来大きな役割を果たして来た、学校教育という制度も、発展的に解消させることが可能になるのではあるまいか。

私は一九八〇年の一月に、オーストラリアを見物に出掛けてみたが、この国の面積は日本の二十数倍もあると聞いて吃驚したものだ。そして気付いたのが、小学校教育にテレビやラジオが、積極的に取り入れられているらしいことであった。子供たちは自宅で、テレビやラジオを通じて勉強し、時折学校に出掛けているということらしいのである。茫然たる面積に、少ない人口のこの国では、必然的な成り行きであろう。私は

かねてからラジオ更にはテレビがここまで発達して来た上は、教育は現在の日本の考え方とは逆に、通信教育が主体にもなるべきであると思えてならなかった。

生徒は自宅でテレビやラジオの教育講座によって勉強するのが日常的になり、年に数回学校に出掛けてスクーリングを受け、その際教師と生徒のまた生徒同志の、生身の接触が図られ、日本人には苦手の、討論による訓練が重ねられることが、自然なプロセスであると思われてならなかった。それがここオーストラリアでは、既に現実の姿になっているな、と直感したことであった。電子機器の無かった時代には、子供や若者を一日のうち最良の数時間を一定の建物に呼び集め、拘束することも已むを得なかったであろうが、生身の人間同志が、毎日顔を合わせなくても済む手段が発達した今日、生徒たちをわざわざ呼び集めて、学校という建物に箱詰めにするというのは、何とも現実には即しない、時代遅れな話と思われるならなかったのである。

この考えの正当性を証明するためには、自分自身がテレビやラジオの講座を聴講してみることだと考えて、ここ数年私はテレビの放送大学や、大学、高校講座を有難く拝聴して、日も是足らずという有様なのである。

大学はもとより、高校講座も、講師は殆んど大学の先生方が勤めていることも、私には注目される現象であった。

こうした情勢が進行して行くと、些か飛躍して云えば、旧来の学校という制度が自然消滅する。その結果入学試験などというものも意味を失なう。従つて当然子供たちの塾通いも無理なく自然に消えて無くなる。こうなつたら今日の日本の社会はどんなに明るく、朗らかになることか。現在でもパソコンが採り入れられた学校では、イジメや体罰、登校拒否や転校退学相次ぐ、旧来の学校と違つて、子供達の眼が輝いてみえるではないか。勉強とは勉強で強いてするものではなく、自ら進んで、眼を輝やかして、自主的にするものであつたことが、今更に思い知らされるではないか。

それにもう一つ気になつていたことがある。それは現行の学校では、一クラスの生徒達の年齢が、ほぼ揃つているのが当然のこととされてはいるが、一クラスがほぼ同年齢であることの方が、むしろ奇妙なことと考へてみてはどうか。現在でも通信教育のスクーリングでは、年齢もまちまち、職業もいろいろということで、境遇や立場の違う人達が、自由に意見を戦わせて、充

実した時を送っているらしいではないか。この点でも通信教育の方が優れていると思われてならない。

ところで、変るのは子供の世界だけではない。オトナの世界にも、自宅勤務という形で、変化はすでに見え始めている。サラリーマン達はやがて、毎日長時間満員電車に詰め込まれて出社する必要は殆んど無くなるであろう。自宅にマルチメディアの装置を据えた一隅乃至一室が必要になるであろうが、出社するのは会議のためだけ、否その会議も通常はテレビで用が足りることになるのは目に見えている。

そうなると人口の都市集中も必然性を失なう。過疎を嘆いていた田舎に、人々がUターンして来る。今切実な問題になつている一極集中という問題も、自然に様相が變つて来る。国土全般に人口が拡散することで、狭い日本が広く使えることになる。森や野原、湖や海がグッと身近になつて、昔の親近性を取戻し始める。人間はやつとこのことで、真の意味で、自主性を獲得することができるようになる筈である。

只しかし、これで日本が豊葦原の瑞穂の国の実質を具現できるわけではない。これから先がむつかしい、といえはむつかしい。ここで必要なのが、ココロの百

八十度の転換だからである。

E・フロムは「動物は直立姿勢をとることによって、みずからを自然から解放した」と云っているが、この emancipation は、後肢で立ち上ったときに、その端緒が拓けたには違いないが、その後万単位の年を経た今日も尚、完了はしていない。先ず自分自身の身を護ることから始まって、自分の家族、自分の部落、自分の民族、自分の国と、その防衛範囲を拡げては来たものの、人類は未だに「自分の」という限定を超えることができないでいる。また今日、ウェーバーだとか、マルクスだとか、ケインズだとかと、経済に関して次々に、むつかしい理論が繰上げられているが、経済、つまりモノに係わる領域から、ヒトは未だ脱却することができない状況である。エゴイズムとモノに対する執着を超えることが、将来の課題である。

貨幣の発明によってヒトは、物々交換の段階を止揚して、経済的に順次発展して来たのであろうが、経済とは要するにモノに係わる事象である。人類の現段階は、後肢で立ち上った時に、ヒトが食を求めて右往左往していた段階を、本質的には脱却し得ていないのである。社会主義も資本主義も、本来モノに関する方法

論に留まっている。そこを思い切って踏み越えると、新生面が拓けて来るのであろう。

中国では版木の発明によって、ヨーロッパでは活字印刷の発明によって、ヒトはお互いに、広く且深く知識や思想を獲得し、伝達することができるようになり、最近ではマルチメディアの、グローバルな発達、普及のお蔭で、その傾向は急テンポに拡大、発展しつつある。これによってヒトは自分を超えて、少なくとも思想上は「自分」を超えて、客観性を身につけることができるようになった。この傾向の浸透によって、ヒトはエゴイズムを超えるすべを体得する方向に進むことになるであろう、そう願いたいものである。

他のあらゆる生物と同様、ヒトも動物であることを、究極的には免がれ得ない以上、日々の糧を追い求め、雨露を凌ぎ、寒暑に堪えなければならぬという、生きるものとしての基本条件は、将来とも脱却することはできない。そこでわれわれに残された emancipation の方法は、現状を否定することではなくて、超えることだ、とせざるを得ない。Negationではなく、transcendence の道以外にない。現状を否定するのではなく、現状は現状として容認しながら、これを超える外

ない。例えば今日われわれは、国を止揚して globalization の方向に向っているが、それは国を否定することではなく、国は国として、その機能を果しながら、しかもそれを超えることなのである。国、nation を超えた暁には、更に超えるべきものが現前する可能性はあるが、当面の問題は globalization であるということになる。

さて、transcendence は如何にして可能であるか。

ここで十数年前に出した本の中で引用した譬え話にもう一度登場して貰うことにする。

「地獄も極楽も環境は全く同じ。食事にしても、両方とも長いテーブルに山海の珍味がヤマと並び、両側みんなが向いあつてすわる。やがて食事が始まるが、ここからがちがってくる。

テーブルには腕よりも長いハシが置いてある。地獄では争ってハシをつかみ、料理を自分の口に入れようとする。しかし、結局は何も食はずじまい。一方極楽では、ハシの先をゆっくりテーブルの向うの人の口にもって行き、食べさせる。相手も同様にして、お互いに満腹になる。」